加茂里山通信第７０号記念号！

加茂里山通信
令和２年 秋号
発行　市原商工会議所
加茂里山通信編集部
編集長　征矢貴造

２０２０年秋の里山生活

２０２０年はコロナに明け、おそらくコロナに暮れた年として後世の歴史に刻まれることになることと思います。昨年の今頃に世界の誰もが予測しえなかった状況に今あって、私たちはその中での生活に慣れてきました。人に会う時や電車に乗ったり買い物をしたりする時にマスクをつけることがマナーとして常識となりました。また買い物などで並んだりエレベーターに乗り込むときなど人との距離をとるソーシャルディスタンスも当たり前となり、混乱もなく皆がそうするようになりました。通夜や告別式に参列することもままならないことに当初は違和感があったものの、今ではそれが普通になり、法事もあまり人を呼ぶこともなくなり会食そのものがなくなってきました。

今ある状況は昨年にあっては異常であったのに現在では普通になっています。生きているうちにはこんなこともあるのだということを皆が体験している昨今です。

昨年まであったいろいろな会合がほとんどなくなり、その分出掛ける機会と外での飲食が減りました。改めて随分そういうものに時間をとられていたなと思います。コロナ禍の影響で仕事も暇になり時間だけが残りました。その時間を主に外仕事に向けることができました。木や竹を伐採し、果樹の手入れをし、畑を耕し、種から苗を育て植え付け、雑草を刈る。必要なものを木工制作で作る、物置に使いやすいように棚を作り、そこに分かりやすいように道具や材料を整理して並べていく。遠くに人が見えるような田舎の状況ではマスクの必要性もなく、気を使うことも、時間を気にすることもなく作業ができます。また、夜には本を読む機会も増えました。

里山での生活は実は忙しく、家にこもっているどころではありません。やることがいっぱいある里山での生活のありがたさを見直すことができました。

この秋は例年行われていた高滝神社の祭礼も神事だけが行われる寂しいものになりました。しかし相変わらず元気に暴れまわっているものもいて、加茂の里山には猿の被害、鹿の被害、そして相変わらず猪やハクビシン・アライグマ、そしてキョンの被害も聞きます。畑では時折キジが走り回り、シラサギとクロサギもやってきます。トロッコ列車の汽笛が鳴り、一雨ごとに秋は深まり、金木犀が香り、コスモスと曼殊沙華は雨に濡れ鮮やかさを増しています。

人の集まる場所でみんながマスクをしている状況を除けば、いつもと変わらない、静かで、日々姿を変えていく里山の秋です。

（征矢里山通信員）

１０月１日　中秋の名月

今年も種をまきました

９月２６日（土）に小湊鉄道沿線の菜の花の種まきが行われました。例年加茂学園の子供たちが親御さんたちとまとまって参加してくれていましたが、今年はコロナ禍の影響で団体への呼びかけはせず、情報を伝え、あとは個々の判断で参加という形にしたと市の職員から説明を受けました。曇りから霧雨へという種をまくには好都合、人にはあいにくという天気の中、高滝駅には３０人以上の人が集まりました。説明を受けた後、手に手に菜の花の種の入ったペットボトルをもち、シャカシャカと振って種をまいていきました。

市原市に越してきて初めて参加したという若い夫婦もいて話をすることができました。お母さんに見守られながら小さい子が一生懸命種をまいていました。

どこの種まきの場所もそうですが、ただ種をまけば咲くというわけではないので下準備が必要です。伸びた草を刈り、それを燃やすなりかたずけるなりして土の見える状態にすることが最低条件です。伸びた夏草を刈るのも結構な労力を要し、それをかたずけるために日を改めてやらなければなりません。場所によれば種をまく土地に肥料を入れ耕したりと時間も労力も必要です。それぞれの場所で多くの人がこの準備に関わりました。

すべては来年の春に一面の菜の花を咲かせるために。

今年開催予定だった「房総里山芸術祭」は１年越しとなりましたが、こちらも準備が進んでいます。今年まいた種が花を咲かせ、訪れる人に幸福感をもたらせたら、準備をした人たちも種をまいた人たちもまた幸福感に包まれることと思います。

（征矢里山通信員）

加茂学園は今 市原市夏季大会

「加茂学園　市原市夏季大会結果」

８月に市原市夏季大会が行われました。加茂学園ではサッカー部、野球部、バスケットボール部、テニス部が大会に出場しました。また個人で陸上大会にも出場しました。

子ども達は猛暑の中最後まであきらめない加茂魂で頑張りました。健闘した結果は下記のとおりです。

・野球部（加茂・南総・双葉中学校の連合チーム）ブロック準優勝
・テニス部団体戦　ブロック優勝
・テニス部個人戦　第３位（鈴木・山本ペア）
・陸上大会　共通４００Ｍ第２位（小宮晴一）
３年１００Ｍ　第３位（小宮樹月）

岩手県被災地学校の 大槌学園と交流！

８月５日（水）、岩手県の大槌学園より、昨年の台風被害に対する義援金が市原市のボランティア団体を通じて加茂学園に届き贈呈式を行いました。義援金の使い方について生徒会役員で話し合いをし、加茂地区の皆さんが少しでも安心できる避難所となるように、発電機を購入しました。

９月２日（水）、大槌学園とはテレビ会議システムで、生徒会役員同士が交流を行い、義援金で購入した発電機と照明を披露し、お礼を伝えました。贈呈式や交流の様子は千葉テレビで放送されました。

（小井田里山通信員）

市原商工会議所便り コロナ禍での会議所の取り組み

今回の新型コロナウイルス感染拡大を機に、これまで表に出ることの少なかった保健所などに注目が集まっています。

コロナ禍において商工会議所もその一つです。会員になれば経営相談などの支援を受けられると漠然と分かっていても、会員メリットはあるのだろうかと疑問を持たれることが多々あります。そのような声をいただきながら、「どうしたら存在意義を示せるのか」と議論を重ね、支援メニューの充実や職員のスキルアップを図ってまいりました。昨年の台風被害からコロナ禍において少しでも企業のお役に立てる機会になったと思います。

市原商工会議所は、国内でコロナ禍が徐々に深刻さを増したことを受け、２月から市役所をはじめとした関係機関と準備を開始。４月中旬から五井会館にコロナ対策の特別相談窓口を設置し、補助金・給付金の相談に対応しました。会員企業に配布した会報誌では感染症対策のほか、雇用調整助成金、各種の資金繰り支援の受け方などをアナウンスし、随時追加支援策などを加えながら情報発信しています。

Ｗｉｔｈコロナ、アフターコロナ対策においては、最新の情報を収集しながら、企業の経営改善策の提案を行っていくことや金融機関や他支援機関、専門家の活用によって継続的な支援を展開しています。

（霜崎里山通信員）

編集後記

今号で創刊以来７０号となりました。春夏秋冬の年４回の発行で１７年半休むことなく発行してきました。加茂村が市原市に合併されて以来、加茂地区の情報を加茂の人間が共有する事がなくなってしまい、地元に対する愛着や思いが薄れていくことが懸念されました。少子高齢化が進み世代交代するたびに地元のことをよく知る人間が減っていくことも危惧されました。

地域の情報を発信し、問題も提起していく、そして加茂地区のことを加茂にいる人間にもっと知ってもらいたい、もっと愛着を持ってもらいたい、そんな思いで創刊し、続けてきました。

この間に加茂地区も変わりました。圏央道ができ交通状況が大きく変わったこと、地域で活動していた組織が南市原里山連合の核となったこと。地域おこし協力隊などの若い人たちが入ってきて活躍するようになったこと。世界に一つのチバニアンが認定されたこと。

私たちが意図したことがどのくらい果たせたのか定かではありませんが、ここもまた通過点ですので、さらに先を目指して気持ちの届く発信を続けていきたいと思います。

（征矢里山通信員）

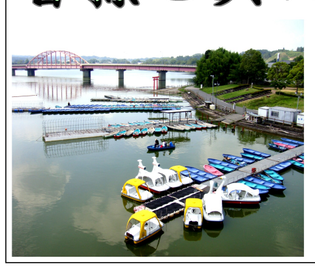
次回は１月２５日発行予定です。

情報提供、取材依頼はお近くの通信員へ。
メールでも受け付けます。
記事に関するご意見、お問い合わせは左記へ。
市原商工会議所
０４３６（２２）４３０５　担当　宍倉
Eメール　1sapo@i-cci.or.jp

房総・養老渓谷の地酒お土産は
養老渓谷駅前
角屋商店
養老渓谷観光協会窓口
市原市朝生原１８１
TEL０４３６－９６－１１０８
FAX０４３６－９６－００５２

愛車のある幸せな暮らし応援します！
安全・安心
有限会社　全日本ロータスクラブ加盟店
小茶自動車
市原市石神２２７
TEL０４３６－９６－０４８２
FAX０４３６－９６－１２９３

皆様と共に歩む観光
ワカサギ釣りの季節到来！
高滝湖観光企業組合
TEL　0436-98-1277



地域おこし協力隊新隊員自己紹介

白石伸幸です

初めまして。本年より地域おこし協力隊に指名いただきました、スポーツ自転車（いわゆるロードバイク）乗りの白石伸幸です。自転車サークルメンバー内では「ノブ」と呼ばれているので、もし見かけたら某お笑い芸人を呼ぶように「ノーブ～」と気楽にお声掛けいただければと思います。

協力隊としての活動では、自転車で走る市原南部の良さなどを発信していき市原のファンを増やしたり、観光の他にも新たな遊びのカルチャーとして自転車に乗ることを目的として南部に来ていただけるような仕組みづくり、地域の方にも自転車に触れていただく機会などを作っていけたらと考えています。

もともとは東京渋谷でイベント企画運営の会社に勤めていたので、市原だけでなく千葉県内各地でも自転車をはじめとしたイベント企画をしていきたいという夢もあります。現在はチバニアンのすぐ近くの田淵の家をお借りし改装して、手始めに自転車乗りや周辺の方が交流できるような休憩スポットを作っていきたいと考えています。

毎週のように自転車で走っている牛久より南部の地域はとても自転車乗りには恵まれていると思います。あまり多くない交通量、周りは自然がいっぱいで国道を走るよりもはるかに空気がいい、少し横道にそれると面白い道があり、初心者でも頑張れば登れる坂道もあります。

また、地域のドライバーさんも速度は多少速いけれど、自転車を大きく安全に避けていただいている方々が多く、大変感謝しています、ありがとうございます。

自転車に乗っていると様々なことを一瞬で考えています。前方は路面の起伏はあるか、穴は空いてないか、左に寄れるスペースはあるか。障害物がある場合は、後続車両の速度と距離は、大型車で風にあおられないか、どのタイミングで手信号を出し避ければいいか、そもそも手信号を出せないような突然の危険な路面状況など。細心の注意を払いながら走っているので、ドライバーの皆さんの協力には感謝しております。

今述べたように安全を意識することは色々とありますが、要点さえ抑えれば自転車で走るというのはとても爽快です。自動車で行く30分を自転車で行く1時間に置き換えるとゆっくりだからこそ、もしかしたらいろんな発見ができたり、健康にもいいかもしれません。

地域の皆様にも楽しんでいただける機会を作っていきますので、その際はぜひご参加いただけると嬉しいです。

また、地元の方だからこそ知る変わった道や、ちょっとした花が咲いて綺麗なところ、オフロードの自転車で走らせていただけるような森や林、その他にも地元で活動されていることなどありましたらぜひ教えてください。自転車での広域の移動を通して地域を盛り上げていきたいと思います。

これからどうぞよろしくお願いいたします。

（しらいしのぶゆき里山通信員）

地域おこし協力隊新隊員自己紹介

院田悠生です

「先生、僕ザリガニを見たことも触ったこともないよ」

昨年、私は千葉市の小学校で第一学年の担任をしていた。運動会も終わり、子どもたちがようやく学校生活に慣れてきたであろう頃の、生活科の授業中にそんな言葉が飛び出した。

まさかそんなはずはと思いつつ確認してみると、なんとクラスの半数以上の児童がザリガニを触ったことがなかったのである。ありえない。

その日の放課後、職員室で主任に確認したところによれば、その小学校の周りには児童を連れて行ってもいいであろう水辺や、ザリガニの捕れる環境がない。生きものを捕まえに行く学習はできず、図工でザリガニの絵を描かせるために前年度は仕方なくネット通販で数匹を購入したそうな。眩暈がする。

かくして私は地元市原市を訪れ、実に十数年ぶりにザリガニ捕りに臨み、小湊鉄道に揺られること二時間。クーラーボックスに入れた捕れたての百匹余りを持ち帰った。

私はなんとしても一学年の子どもたちにザリガニの飼育をさせたかった。本物を触らせて絵を描かせたかった。クールパックで配達されてきた数匹を四クラスでたらい回しにさせるなんて御免だ。六歳の子らが小学校に上がり、はじめて命を扱う授業である。

その点でザリガニは素晴らしい。まず何と言っても丈夫である。ちょっとのことで弱ったりしない。子どもに当番制で世話をしてもらい、エサやりや水替え時のルールも考えながら飼育できる。

多少の失敗があってもおおよそリカバリーできる。触ってみようなんて言えば、挟まれたら痛いから、子どもも触り方を考える。このときは子どももザリガニも必至である。仮に挟まれたとしても怪我をするほどではない。そうして世話をして触るうちに、どんな子が描いたとしても画用紙一枚一枚にしっかりとザリガニの形が浮んでくる。絵の具を混ぜて、ザリガニの体色を作り始める。

そして授業が終わってもザリガニはいなくならない。年度の前期課程が終わって涼しくなる頃、大人の雌が卵を抱えたことに気付く児童が必ずいる。赤ちゃんはどうすれば育つだろうか。どうやって調べようか。みんなが二年生になったら、増えたザリガニはどうしようか。元いた場所に逃がしていいのだろうか…

こうした学びは常に子どもの身の回りにありふれていなければいけない。私が六歳の時は特別なことではなかった。それも、電車で一時間以内の場所に、まだまだ豊かな自然環境が残る以上はそれを享受しなければもったいない。

そして私は市原市に戻ってくることを決めた。東京から数時間圏内に位置する、多様な自然が残る市原市。学校現場でできること、私自身学ぶこともまだまだいくらでもあった。しかし、少しでも現場に立っていた者がそうしたフィールドに行ったら何かできないものか。ここから何ができるだろうか。

過疎化が進み閉校する小学校がある。人が住まなくなり、傷んでいく古民家がある。耕作放棄され荒れた田畑がいくらでもある。ここで何ができるだろうか。

市の外から足を運びたいと思えるような、地方だからできる育み方に気付けるような、そんな学びの場を作りたい。そんな想いで私は市原市に戻ってくることを決めた。

（いんだゆうき里山通信員）

彼岸花色鮮やかに

NHKのニュースで石神の彼岸花が紹介されていましたが、加茂地区の他の地域でも9月後半から10月にかけて咲いています。別名島殊沙華は県道81号線の大久保界隈にも目立ちますが、これは高滝駅の山側の田んぼの周りに咲くものです。少しずつ増え見ごたえのあるものになってきています。（征矢里山通信員）

里山の御馳走

二〇二〇秋

秋の里山ではイノシシが猛威を振るっています。山裾に植えられたミョウガが荒らされ、一部がなぎ倒されました。栗の実も家から近くでないとみんな食べられてしまいます。自然薯畑もイノシシに荒らされ被害は甚大です。その後ある程度はミョウガを収穫できましたが、帰ってから「ミョウガを取りに行くときはマムシがいるから、鎌を持っていかないと危ない」と注意を受けました！イノシシのおかげでマムシも逃げてしまったのでしょうか？

今年のお彼岸は貰ってきた栗を使って『栗赤飯』を作りました。『栗の渋皮煮』も作りましたが、拾ってすぐの新しい栗ではなかったのであまり良い出来ではありません。

『栗の渋皮煮』

栗1kg　重曹大さじ1、砂糖500～600g、しょうゆ大さじ1

栗はたっぷりの水に入れ、沸騰するまで茹でる。茹でたら少しずつ鍋から取り出し鬼皮をむく。鍋に栗を入れたっぷりの水と重曹を入れて15分～20分中火で煮る。栗を水に取り、筋を丁寧にとる。再び水から約15分茹でる。湯が透き通るまでこれを3回ぐらい繰り返す。水カップ2と砂糖を入れて煮溶かし、栗を入れて15分中火で煮る。シロップに栗が浸るようにクッキングペーパーをのせて一晩おく。栗を取り出し、煮汁をひと煮立たせる。栗を入れしょうゆを落とし5分ほど煮て火を止める。

『みょうがの酢漬け』

きれいにしてから半分に切り、さっと熱湯にくぐらせてから甘酢に漬けます。しばらくすると、きれいなピンク色になります。焼き魚の添え物などにピッタリですね。ミョウガとしその実がそろったら、茄子や胡瓜と生姜を一緒に刻み『やたら漬け』この時期限定の御馳走です。（山栗で作った栗ご飯とやたら漬けの写真です）

『イチジクの赤ワイン煮』

小さめのイチジク1kgはきれいに洗いへたを取る。浸るくらいの水を入れて火にかけ、沸騰してから中火で10分ほど煮る。ザルに上げ水を切り、鍋に赤ワイン2カップ、砂糖500gを入れて煮溶かし、イチジクを入れて火にかける。沸騰してから中火で15分くらい煮る。（甘さはお好みでどうぞ）

キンモクセイが香る季節になりました。山へ入る際には長靴を履いて武器を持ち、ヒル除けスプレーを用意してケガの無いようにいたしましょう。

（大曽根R里山通信員）

こっもど紀行

房総里山芸術祭

房総里山芸術祭
ICHIHARA ART×MIX 2020+
晴れたら市原、行こう。

いちはらアート×ミックスも1年の延期で作品の維持管理に手間がかかっています。

10月3・4の土日には多くのボランティアの皆さんが集まって作品の手直しがされていました。月崎の古民家を使い、元々きれいに作られた庭園を（かなり立派な庭園です）作家の手を入れることで生まれ変わらせた感じの作品でした。しかしこの夏の間に草が生い茂り、庭園は荒涼いものになってしまっていたのです。

菜の花プレーヤーズを中心に、市役所の職員も含めて2日間の手作業です。この経験で改善点も見つかり、より完成度の高いものに進化しそうな予感もします。ぜひ、恒久的な作品として存在感を発揮してほしいところです。

イベントの1年延期には維持することに予想外の手間もかかり、新たな発見もあり、といったところでしょうか。

（大曽根R里山通信員）

上総の国に牛車が誕生

今年は更級日記の作者、菅原孝標の女が京に向けて上総の国を旅立ってからちょうど1000年目にあたり、更級日記千年紀として市原市観光協会で当時使われていた牛車（ぎっしゃ）を創造復元しました。出立時数え年13歳だった彼女は源氏物語の世界に強いあこがれを抱く夢見る少女でした。当時の貴族たちの移動手段であった牛車に彼女が乗る機会もあったかもしれません。製作した中桐友哉さんは、これを造るにあたり京都に足を運びいくつもの牛車を見てきたそうです。脇の窓も上に開くものもあれば横にスライドするものもあるそうで、装飾やカラーリングもいろいろあると話してくれました。当時の貴族の家の床は高く、牛車の床はその高さに調整されていて段差なくそのまま水平に乗り込むことができたそうです。また車輪の製作に一番苦労されたとのことでした。

上総の国府はこの市原市にあり、遺跡から国分寺、国分尼寺が当時日本で最大級のものであったこともわかっています。上総の国が京からみて辺境の地にありながらとても栄えていたことがわかります。ただその国府がどこにあったかは未だに定かではありません。本来であれば市原市は上総市となってもよかったのではないかとある人が言っていました。そうであれば上総国と国府がそのまま多くの人に説明することなく今現在のこの地と結びついたはずです。今市原市でこの上総の名を残すのが小湊鉄道の駅名ぐらいになってしまったのはとても残念です。

この牛車が上総国と市原市を結びつけ、いずれ判然とするかもしれない国府の所在と上総国が再び脚光を浴びる日が来ることを願います。

（征矢里山通信員）

人と環境が一体となって大切な未来へ
自然環境と人間との調和を目指して
杉田建材株式会社
本　　社　市原市万田野 26　TEL 0436(96)1311
市原支店　市原市惣社1－1－22　TEL 0436(24)0511
南総支店　市原市牛久450－1　TEL 0436(50)0111
URL　http://www.sugita-group.com/